
 ひ ろ ば

賞公害をどう防ぐか

—ラベルでスイカの売れる世にあって—

松田 博嗣 (九大名誉教授)

(1995年2月15日受理)

私は1972年に九州大学理学部生物学教室に迎えられまでは、狭い意味の統計物理学を主専攻とし、所属学会は物理学会のみであったが、以後は講座名のこともあって、数理生物学者と自らを位置づけ、91年に退官するまでは、幾分意識して物理学会との距離をおくようにしていた。2兎追うものは1兎をも得ずと言うこともあるが、それ以上に、折角生物学教室が呼んで下さったのだから限られたスタミナをそちらに振り向けようとの思いが強かった。しかし集団遺伝学や個体群生態学を学ぶうちに、これは統計物理学の分野であるとの思いが強まり、自由の身になったこともあって、他学会に属した経験を踏まえて、物理学者のあり方を気にするようになってきた。

今年は戦後50年を迎えるが、最初の20年は「みんな貧乏が悪いんや」の時代で、科学と技術は救世主のように扱われ、ノーベル賞効果もあって、理論物理学者はあこがれの的であった。1960年代からは公害問題が広く認識されてきたが、80年代バブルの時代に入ると、「研究も金次第」という風潮が拡がり、物理学者も巻き込まれて、正論よりも目先の損得に目が向くようになり、若者の科学離れが進んだ。バブルがはじけた現在、これを機に科学者が原点に立ち返って考えないならば、そのつけは計り知れないものと心配される。

私がここで賞公害と題して投稿するのは、本誌1月号の編集後記に触発されたからである。そこでK. Y. 氏は「大江健三郎氏がノーベル賞を授賞し、文化勲章を辞退した。私はあらゆる賞というものに反対である。」とし、「好きな研究をして生活ができる。これだけで、私には十分すぎる賞である。」と結ばれた。私も結びの部分には大いに同感であるが、個人的に賞はいらないというのと、褒賞制度そのものに反対するというのには、かなり隔たりがある。

科学哲学者 村上陽一郎氏は近著「科学者とは何か」において褒賞制度の是非を論じ、個人的見解として、「ノーベル賞はもはやその役割を終ったと考えており、害がこれ以上肥大化する前に、少なくとも一旦終止符を打つべきであると信じている。」と書かれた。し

かしあらゆる賞というものに反対とはされていない。他方において、賞はもっと増やすべきだとの意見も耳にする。

褒賞制度の目的は懸賞、感謝、激励の3つに大分けされよう。懸賞というのは札束で面を張られて働く様や、前にぶらさがるニンジンに向かって走る馬車馬などが連想されて、誇り高い科学者にとってはいやな響きではあるが、動機はともあれ結果として人々に幸せがもたらされるならば必ずしも不当とは言えまい。以前私はノーベル賞の授与が、業績において一流と評価の定まった人が、賞金により収入に対する煩慮から解放され、さらに良い仕事をするようにとの願いを込めて行われるものと考えていた。しかし、ノーベルの遺言にこのことは記されていないし、現実は一応業績に対する感謝ということがないでもないが、「二重らせん」に赤裸々な告白があるように、大きな懸賞のように受け止められ、スポーツ感覚で研究競争が行われている面が少なくない。単なるスポーツで済むならまだしも、いわゆる「無邪気で危険なエリートたち」が公害を気にしては勝てないばかり、折角の才能を浪費して他人を不幸せにするのを激励するなら大問題である。

とは言え、賞は良いことの激励にもなるからその得失は速断しがたい。しかし、現在の賞が狭い専門分野の研究業績に向けられがちであることや、賞で貼られたラベルを過度に利用しようとする傾向があることは見逃せない。事実、最近では以前に増して賞の有無を人事や補助金の採否の資料として重視しようとするようになってきた。

賞を取るためには、専門に全力投球するのが有利であり、皆が賞を意識しだすと、ますますそうせねば取りにくくなる。賞を決める人の機嫌を損なうような発言は控えないと差しつかえるかも知れない。人にアイデアを取られては大変だ。漠然とした不安感や切迫感が研究者の心をむしばんで、事実の公開や意見の開陳にブレーキがかかりがちになる。そうでなくても昨今は、「今は言えないが」とか「聞こえたら大変」とか、かつての理論物理学者なら冗談にも言わないようなことを散見するようになってきた。

学者の営みは狭い分野での研究業績ということもあるが、知的探究者として広い問題に関心を寄せ、迷信を斥けて後進の育成や周りの改善に努力することも劣らず大事である。人によって重点のおき方は様々であり、それが学者集団全体としてあるバランス状態にある。賞の重視がこのバランスを好ましくない方向にシフトさせるのではないかも心配である。

では賞公害はどうして防げるであろうか。すべての賞をやめれば簡単かも知れない。K. Y. 氏は「スイカにラベルを貼る必要があるのは、その良否を判断できない人のためである。」と胸を張られる。でも現実にはスイカはラベルで売れるし、買うときにラベルが欲しいという人もあろう。極論はいつまでも多数意見にならず、現実の公害除去や防止に役に立つか心もとない。問題は人事や研究補助金の採否など公的判断においてすら、別のところで貼ったラベルに物を言わそうという傾向ではなかろうか。例えばノーベル賞受賞を文

化勲章授与の判断に用いるなどもこれに類する。

私がかつて基研で人事に関与した時には、受賞や論文数、被引用回数などは全く議論にならず、短い時間の本質的な議論でよい結論が得られた。応募者の方でもこんなことまで一々書かされたら叶わないと思う人が出て、反って望ましい人を逃すことになるかも知れない。

よく知られているように、日本物理学会賞というものはない。物理学が尊敬されていた60年代、日本遺伝学会はこれに倣って学会賞を廃止した。しかし、80年代に入ると賞復活が会長主導の下に推進され、総会で多数決の結果復活が決まった。このとき、「賞をもらえないような人が反対する。」という会長の言葉が効を奏した。

かつては物理学の隣接分野が物理学のやり方に習おうとしたが、今はどうであろうか。他学会にはあるのに学会賞がないと物理屋は損だとの話も耳にする。学会賞を持たないのは確かに見識ではあるが、賞に値する研究はいくらでもあるが、賞はないと言えるように、他分野の人にも判りやすく説得できる努力も大事であろう。

要するに賞には良いことへの激励や感謝という本来の目的と共に、危険な行動の誘発や賞の対象にならぬ好ましい活動の抑制や賞による差別といった公害が伴っていることは大いに気を付けなければならない。研究者自身この問題点を認識し、問題を考える仲間を増やす努力が必要である。幸い多くの研究者は講義や学会その他で多くの人に呼び掛け話し合う機会が与えられている。物理学は根本的に因果を究めようとするのが特徴であるから、例えばラベルでスイカを買わぬといったようなことも、個人の自負や生活信条に留めることなく、現実の研究社会のあり方に反映されるよう討論や友達の輪を拡げられることを期待してやまない。「物性研究」もそのための良い「ひろば」として役立つことを願ってやまない。

文 献

- 1) 村上 陽一郎： 科学者とは何か（新潮選書，1994）
- 2) ワトソン著，江上 不二夫・中村 桂子 訳： 二重らせん（講談社文庫，1986）
- 3) 竹内 啓： 無邪気で危険なエリートたち（岩波書店，1984）